

さらなるコスト削減につながるか

バイオポット苗木を用いた植栽実証検討会



(趣旨説明をする安永茨城森林管理署長)

平成27年10月22日(木)、茨城県高萩市の国有林において、バイオポット(生分解性栽培容器)苗木を用いた植栽実証試験検討会が茨城森林管理署主催で行われました。当日は、林業関係者

を中心に総勢70名(当センターから3名)が参加しました。植栽したバイオポット苗は三重県の速水林業が開発したもので、土壌で分解するポリ乳酸不織布のポット(長さ約16cm、直径



3cm/使用土は鹿沼土)に挿し木(穂の長さ約40cm)して半年育てたヒノキ苗(写真右)。当日、速水林業から開発の経緯や現状が報告され、その後植栽方法について指導を受けた後、5班に分かれて0.6haに1,200本を植栽しました。

参加者からは、挿し木の時季や仮植方法、目標工期などに関する質問が出されました。挿し木時季については、基本的には労務事情に応じた対応としているが、夏の暑い時季と冬の寒い時季を避けて3~5月と9月~11月に実施。仮植は、苗木を木材搬出用の集材機で運搬しているが、根を水に浸してから



梱包し、現地で遮光ネットを被せておけば1～2ヶ月は問題ないので行わない。工程は人によ



講師の速水林業の方々
(バイオポット苗木について説明及び実演)

て差があるが、haあたり平均500本位は可能。慣れれば多い人で800本の者もいる。

茨城森林管理署及び当センターでは、現在コンテナ苗の実証試験を実施していますが、播種苗のため山出しまでに最低1年半かかることから、このバイオポット苗が本格的に実用化されれば、今後の主伐・再造林時代に対応した苗木の確保やコスト削減にも繋がると期待しています。

現在、茨城県内ではスギ、ヒノキの挿し木苗生産は行っていないことから、可能性の検証など今後の取り組みに期待されます。

本センターとしてもこれらの取り組みを支援できないか検討して行きたいと考えています。

(担当：業務係)



関東森林管理局 森林技術・支援センター